

株式会社JALスカイ
成田事業所
空港オペレーション第3部

平瀬 早貴さん



安全な旅を創る一員として、 「いってらっしゃい」の思いを込めて

新型コロナの世界的な広がりや危機的状況に陥った航空業界。思うようなサービスができず、辛い時期もあったそうだが、それでもこの仕事が好きだから、やりがいを失うことなく働いてくれた。憧れだった業界で働く、平瀬早貴さんに話を聞いた。

日本の空の玄関口、成田国際空港が平瀬早貴さんの職場だ。株式会社 JAL スカイに入社して5年目。JAL グループの国際線の航空機、JAL が受託する外資系航空会社航空機での搭乗業務を主に担当する。

ときには、時間ギリギリのお客さまを案内しながら、荷物を持って空港を駆けることもあるそうで、「足腰はだいぶ強くなりました」と笑顔を見せる。たくさんの人で成り立っている仕事。その中で「決められた時間で、お客さまが安心して、快適に出発できるようにするのが役割」と語る。

「JAL が掲げるフィロソフィーに、最高のバトンタッチというのがあるのですが、『いってらっしゃい』

の思いを込めて、パイロット、キャビンアテンダントへ引き継ぎ、何の不安もなく飛行機の扉を閉められた時にやりがいを感ずります。安全な旅を創り出すチームの一員であると思えるんです」

留学で航空業界へ憧れを抱く

航空業界での仕事が夢になったのは中3のとき。幼いころから習っていたクラシックバレエの勉強のためにオーストラリアに2週間の留学をした。初めての一人旅に不安が募ったが、その時、空港で面倒を見てくれたグラウンドスタッフの女性が、とて

ひらせ さき

1995年熊本県生まれ、2014年専修大学玉名高校（2023年4月より専修大学熊本玉名高校）卒。2018年専修大学文学部英語英米文学科卒業後、株式会社JALスカイに就職。趣味は温泉。



↑ 中学時代、バレエの発表会



↑ 中3でオーストラリアにバレエ留学

も優しくて、「憧れのお姉さん」になった。

高校は熊本県の専修大学玉名高校。大学進学では、夢に一步でも近づくために故郷を遠く離れ、専修大学に進学した。しかし、一人暮らしを始めると…。

「すごくホームシックになりました。夏休みに帰省するともう戻りたくなくて、2週間の予定を一日一日と延ばして結局1カ月もいました。最後は妹を無理やり東京観光に誘って、一緒に東京まで来てもらいました (笑)」

そんなふうにとスタートした大学生活だったが、徐々に慣れていった。大学時代に特に力を注いだのは、上村妙子教授のゼミナールだ。

「なによりメンバーが仲良くて楽しかったです。ゼミでは、フィールドワークを通して異文化や日本文化について学びましたが、多様な文化や価値観などを理解できたことは、いまの仕事にも活かしています」

目指すはサービスのプロフェッショナル



就職活動の際は地元に戻ることも考えたが、「航空業界で働きたいと東京に出たのだから」という父親の言葉に背中を押された。

2018年春に株式会社 JAL スカイに就職。

入社翌年2019年の夏には、系列会社との人事交流で那覇空港の国際線で1カ月ほど勤務。その時、旅行で沖縄を訪れた母親と妹が、元気に働く自分の姿を見て喜んでくれたのが「とても嬉しかった」。

そして2020年、新型コロナウイルスが世界に広がり、航空業界は大きな影響を受けた。移動制限の



↑ 大学時代、ゼミ仲間と。後列右から3人目が上村教授、左端が平瀬さん



↑ 学生時代の友達とシンガポール旅行。左端が平瀬さん

中、渡航するのは特別な事情を抱えた人のみ。

「『どちらを旅行されるのですか』などと、それまで気軽にできた会話もできず、お客さまを楽しく送り出すことができなくなってしまったのが辛かったです」

現在、空港に利用客が戻りつつある。だが、コロナ以前と違い、どんなコミュニケーションが喜ばれるのか、人との距離の取り方は難しく、時として「見えない壁に、もどかしさを感じる」と語る。

息抜きは温泉。空港の近くにお気に入りの露天風呂があって、そこでのんびり湯に浸かりながら飛行機を眺めていると、しんどいことがあってもリフレッシュできるそうだ。

「飛行機が大好きで、見ているだけでも楽しいです。人にも言われますが、飛行機マニアなんです」

現在、チームの仕事の割り振りを行うアサインコントロールや新人研修なども任される。企業内研究制度を利用して取得した老人や障がい者など、行動に不自由がある人へのサポートの専門家「サービス介助士」の資格を活かし、社内でインストラクターも務めている。

「目指すのはサービスのプロフェッショナル。まだまだ自分には伸びしろを感じていて、それが嬉しくもあります」